

## 最優秀賞

どろぼうの悲しみ

(でんでんむしのかなしみ)

やまと そら

どんよりとした雲が月をすっぽりつ  
んだ夜のことでした。街はずれの森のひ  
ときわ大きい木のうろの中で、今にも泣  
き出しそうな顔をした青年が一人でふる  
えていました。

青年の骨<sup>ほね</sup>ばった肩<sup>かた</sup>からボロボロのカバ  
ンがずり落ち、その中からころんとパン  
が一つ飛び出しました。青年のくぼんだ  
目がそれをとらえると、ごくりと大きく  
のどが鳴りました。

「いや！ これを食べちまったら、もう  
おしまいだ！」

それは、夕方に街のパン屋で青年が盗ぬすんできたパンでした。初めての盗みでした。けれども、どうしても食べることはできませんでした。

「ああ、でも、腹はらがへった。」

「ええ、わかりますとも。わたくしどもも同じでございます。」

どこからか丁寧ていねいな返事が返ってきて、青年はひやっと飛び上がりました。キョロキョロと辺りを見回しますが、人の姿すがたはありません。青年が首をひねって、ふと足元に目をやると、なんとたくさんのカタツムリが二、三十匹さんじゅうびきほどぞろぞろと集まっているではありませんか。

「ひえっ。」

「驚おどろかせてしまいましたかな。けれども、わたくしどもは本当に腹がへっておりまして、どうかあなた様がお持ちのものを

恵んでいただきたいのです。」

先頭にいた一番大きなカタツムリが声の主のようでした。青年はじりじりと後ずさりながら首を横に振りました。

「とんでもない！　これはあげられません。」

「いえいえ。わたくしどもが欲しいのはそのパンでなく、あなたの腹の中にある悲しみにございます。」

「おれの腹の中の悲しみだって？」

たしかに青年の中には悲しみがいっぱい詰まっていた。腹が減った悲しみ、盗みをしてしまった悲しみ、住むところのない悲しみ、お金がない悲しみ、一人ぼっちの悲しみ……両手で数えても指が足りないくらいです。

「わたくしどもはこの背中の殻に悲しみをいっぱいに入れて、それを少しずつ食

べて旅をしてきたのですが、すっからか  
んになってしまいました。大変申し訳わけな  
いのですが、お分けいただきたいのです。  
いや、全部よこせとは言いませんよ。で  
も、わたくしたちが悲しみをいただければ、  
あなたの中の悲しみもなくなりますし、  
あなたにとっても悪い話ではないのでは  
ないですかな。」

「おれの中の悲しみがなくなる？」

悲しみがなくなれば、何も考えずにこ  
のパンが食べられるだろうか……と青年  
は考えました。パンをじっと見つめてい  
ると、じんわりとよだれがわいてきて、  
青年はそれをごくりと飲み込みました。

「よし、いいだろう。で、おれはどうす  
ればいいんだ？」

「わたくしどもを飲み込んでいただきた  
いのです。」

「ええ！それは、ちよつと……」。

「大丈夫だいじょうぶです。悲しみをいただいたら、ちゃんと外に出てまいりますから。もちろん、痛いたくもありません。」

「ええい！ やってやろうじゃないか！ どうせ、こつちも腹はらぺこだ！」

青年がドンツと胸むねを叩たたくと、カタツムリたちがツノを打ち合わせて拍手はくしゅをしました。

「ありがとうございます。でも、かまないでくださいよ。」

カタツムリたちは青年の前に一列に並び、コロンとそれぞれの殻の中におさまりました。青年はそれをひよいと一つつまんで、パクリ、ゴクツと一飲ひとみにしました。

しばらくすると、何やらへそのあたりがむずがゆくなってきました。青年が自

分のへそを出して見ると、へそからカタツムリがぽこっと出てきたのです。出てきたカタツムリの殻は瑠璃色るりいろにほんのりと光っていました。

「靴くつに穴あなが空いている悲しみ、をいただきます。ごちそうさまです。」

そう言われれば、穴の空いた靴を見ても何とも思わなくなっている気がしました。青年は気をよくして次から次へとカタツムリを飲み込んでへそから出しました。

「おや、お前で最後かい？」

それは一際ひときわ小さいカタツムリでした。まだ子どもなのかもしれません。それまで大きなカタツムリを飲み込んでばかりいたので、簡単かんたんに飲み込むことができま

した。  
ところが、へそから出てきたカタツム

リを見て青年は驚きました。今までと違<sup>ちが</sup>い、小さなカタツムリはほんわりレモン色に光っていたのです。

「ああ！ おまえ、それは悲しみではなく幸せだ！ お返ししなさい！」

瑠璃色のカタツムリたちがあわててレモン色のカタツムリを取り囲<sup>かこ</sup>みました。

「そうだったの？ だって、もうこの色のしかなかったんだもの。どうりでまずいと思っただんだ。」

レモン色のカタツムリはかわいらしい声でそう言うと、青年の手によじ登り、ふるふるとふるえました。

青年はじんわりと何かあたたかいものが身体の中に入っていくのを感じました。目を閉<sup>と</sup>じると、幼<sup>おきな</sup>い頃<sup>ころ</sup>に死んでしまったおばあさんの姿<sup>すがた</sup>が浮かんできました。

「そういや、靴に穴を空けるたびに『よ

く歩いたね』ってばあちゃんが褒めてくれたっけな。」

青年がそうつぶやくと、靴に穴が空いた悲しみを食べたカタツムリの殻が瑠璃色からレモン色に変わりました。

「あら。」

カタツムリは仕方なく、青年の手に登ります。

「腹が減ると、次食べるものが余計に美味しくなる、って笑ってたっけ。」

青年が笑うと、またカタツムリが一匹レモン色になりました。それから、次から次へとカタツムリたちは色を変え、あつという間に一匹を残してカタツムリたちはレモン色になってしまいました。

いつの間にか夜が明け、空が明るくなっていきます。

「パンを返しに行こう。」



青年が立ち上がると、最後のカタツムリもレモン色に光りました。

それからしばらく後のこと。街のパン屋の店番に新しい見習いがたつことになりました。まだ弟子入りしたばかりでしたが、働き者だとパン屋の親方もお客さんに話しています。

「これ、おれが初めて焼いたパンです。おひとつ、いかがですか？ 食べた人が幸せになるように丁寧に焼きました。」

「おもしろい形なのね。」

お客さんが手に取ったパンは、まるでカタツムリの殻のような渦まきの形でした。